

そもそも縄文時代とはどんな時代？

—縄文時代の始まり—

今から約7万年前に始まった氷河期は、約1万年前に終わりを迎えます。ヨーロッパ北部や北アメリカを厚く覆っていた氷河や氷床が溶け、海に流れ込むと、海面が上昇し、それまで陸地だったところも次第に海になって行きました。

氷河期が終焉を迎えようとする頃、それまで石器を使っていた旧石器時代から、新たに土器を使う文化へと変わって来ました。縄文時代の到来です。

縄文時代は人々の生活を大きく変えていきました。まずは土器の使用です。土器を使用することで『煮炊き』という調理法が可能になりました。温暖な時代が到来し、広葉樹が広がると木の実などが豊富に採集されました。土器によって食材のあく抜きをし、軟らかく煮て食べることが可能になりました。そして食材のバリエーションも増えました。

石器の変化もありました。旧石器時代は投げ槍^{やり}を使ってオオツノジカやナウマンゾウなど大型動物を捕らえて食べていましたが、縄文時代にはこれらの大型動物がなくなって、ニホンジカやイノシシ、ウサギなど中型・小型の動物を捕まえずにはなりません。

縄文時代には石製の矢じりが作られました。つまり弓矢の使用が始まったのです。これによって小型の動物を簡単に捕らえることが可能になりました。

また、これまで石を打ちかいて作った打製石器から石を研磨して形を整えた磨製石器も使用するようになりました。特に磨製の石斧^{いしおの}は丈夫で木材の加工を可能にしました。

『丸ミノ型磨製石斧』という石器で丸太をくり抜き、丸木舟を作って海に出て、本格的に漁^{とりのりょう}も行うようになりました。動物の骨で作った釣針^{つりもり}や銚^{しやう}も使われています。また貝の採集も行うようになりました。

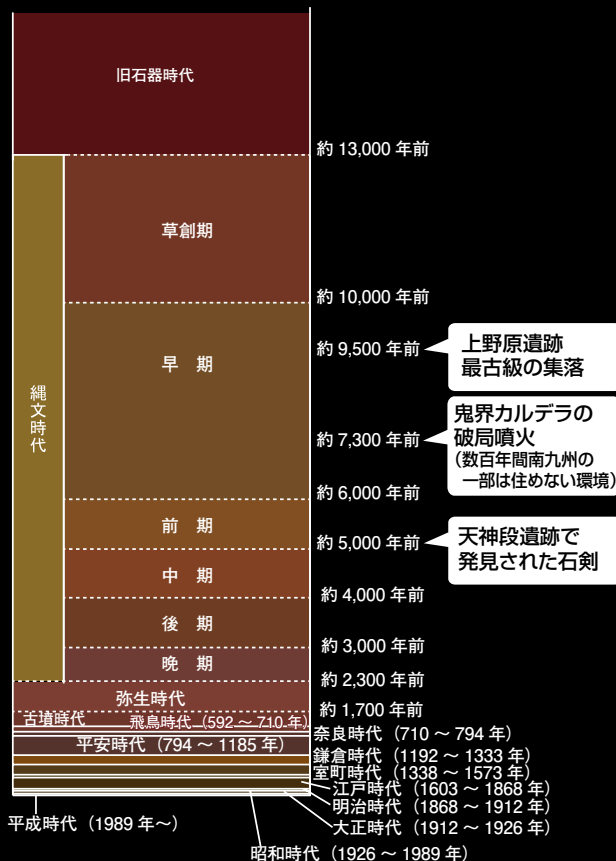
このようにして、旧石器時代よりもはるかに食材確保が安定するようになると、縄文人は長い期間、一定の場所に住むようになります。そして集落が形成されていきました。

右図にあるように縄文時代は非常に長い時代です。約10,000年も続きます。考古学では縄文時代を草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分類して研究を行います。

—縄文時代早期に花開いた南九州の縄文文化—

縄文時代は南九州から始まったとさえ言われるほど、鹿児島県内各地には縄文時代早期の集落跡が多く発見されています。霧島市国分の上野原遺跡は日本最古級の大規模集落跡が発見されたことで有名です。

また、縄文時代早期の日本列島で特に南九州は最も成熟した文化を持っており、例えばトンネル状の炉を使った燻製施設^{くんせい}、焼いた集石を使った蒸し焼き施設^{つば}といった調理施設、土偶や『耳栓』という土製の耳飾り、壺形の



土器などは、日本列島の中でもはるかに早い段階で使用されています。

また、南九州の縄文早期の土器は貝殻を押し当てて模様を施したものが多く、他地域には無い角筒形の土器があるなど独特の文化を形成しています。

—南九州縄文早期文化の終焉—

約7,300年前、薩摩半島から南へ約50kmの大隅海峡にあるカルデラが破局噴火を起こしました。南九州全土に大量の火山灰が降り注ぎ、所によっては火砕流に見舞われました。本町ではこの噴火による噴出物の堆積は約50cmに及びます。

これによって南九州の縄文文化は壊滅的なダメージを受け、南九州の一部では数百年間、動植物は生存できませんでした。

—縄文文化再び—

噴火から1,000年以上たった縄文時代前期には再び人が住めるような環境ができあがったようです。ただ、早期のように特別に発達した縄文文化はありませんでした。

この時期の縄文人は盛んに航海を行っているようで、当時九州全土で使われていた土器と同類の土器が、北は朝鮮半島、南は屋久島、種子島、奄美大島、沖縄まで確認されています。全国的に見てもこの頃にこれだけの広域的な航海を行っているのは、九州の縄文人の特徴と言えます。